

第23回 夏期福音特別集会 (3) (鹿沢)

自然靈然

——マタイ伝第6章19～34節——

1976年8月21日

小池辰雄

在ることが在らしめている 白熱の愛の圧倒 福音書はわがキリスト 天心 神有 天眼・霊
眼 神知りたもう 已むを得ざる 無極 靈法即如 無極絶対 無為の為 自然靈然 お前を
除け者にはしない 覚他 一日を永遠として 儂くみえても儂くない 無色無限色

【マタイ6】

19 なんじら己がために財宝を地に積むな、ここは虫と錆とが損い、盗人うがちて盗むなり。20 なんじら己がために財宝を天に積み、かしこは虫と錆が損わず、盗人うがちて盗まぬなり。21 なんじの財宝のある所には、なんじの心もあるべし。22 身の燈火は目なり。この故に汝の目ただしくば、全身あかるからん。23 然れど、なんじの目あしくば、全身くらからん。もし汝の内の光、闇ならば、その闇いかばかりぞや。24 人は二人の主に兼事うること能わず、或は、これを憎み、かれを愛し、或は、これに親しみ、かれを軽しむべければなり。汝ら神と富とに兼事うること能わず。25 この故に我なんじらに告ぐ、何を食い、何を飲まんと生命のことを思い煩う、何を著んと体のことを思い煩うな。生命は糧にまさり、体は衣に勝るならずや。26 空の鳥を見よ、播かず刈らず、倉に収めず、然るに汝らの天の父は、これを養いたもう。汝らは之よりも遙に優るる者ならずや。27 汝らの中たれか思い煩いて身の長一尺を加え得んや。28 又なにゆえ衣のことを思い煩うや。野の百合は如何にして育つかを思え、労せず、紡がざるなり。29 然れど我なんじらに告ぐ、榮華を極めたるソロモンだに、その服装この花の一つにも及かざりき。30 今日ありて明日、炉に投げ入れらるる野の草をも、神はかく装い給えば、まして汝らをや、ああ信仰うすぎ者よ。31 さらに何を食い、何を飲み、何を著んとて思い煩うな。32 是みな異邦人の切に求むる所なり。汝らの天の父は凡てこれらの物の汝らに必要なるを知り給うなり。33 まず神の国と神の義とを求めよ、然らば凡てこれらの物は汝らに加えられるべし。34 この故に明日のことを思い煩うな、明日は明日みずから思い煩わん。一日の苦勞は一日にて足れり。



● 在ることが在らしめてくる

実はこないだの8月15日は、終戦、敗戦記念日というのは、私の兄貴の生れた日なんです。また、8月15日は我々キリスト者にとつても、忘れることのできない日でもある。これは前に『ハレルヤ』誌の40号にも書いておきました。ザビエルが天文18年(1549年)8月15日に鹿児島に渡来して日本伝道の第一歩を印した日であります。ザビエルはポルトガル語で語つても、聞く者は分からない。分からないけれども、福音がいかに御霊の響きであるか。

「わが言は靈なり、生命なり」

という、この「わが言」なるキリストの言を本当に「靈なり生命なり」という事態をもつて、質をもつて、ザビエルは語つた。であるから、意味は分からなくても、打たれたんです。それでも驚くべきキリスト教への、福音への改宗者が出て、何万人というわけですね。その意味において、アッシジのフランシス、このザビエルというような人物は全く使徒的次元の伝道者です。その点からいうと、ルター、カルビンはかなわない。ルター、カルビンはまた別な面で非常に貢献した驚くべきキリスト教界の第一級の人物でももちろんありますけれども。

ザビエルというのは、よく無教会が、

「カトリックはザビエルの腕がどうのこうの」

なんて言つて、そういう「カトリックは」と言つて、いきなり一言にけなしてしまうようなことはいかんです。いわゆる神父さんという人たちのなかには本当に深い祈りの人がいます。また、カトリックにおいては——それは半分は形式であるかもしれないけれども——形式をまた形式でないものに行っている人がある。絶えざる祈りを、不滅の祈りを、24時間交代で続けている。

この兄貴のことが出ましたので、ついでに申し上げますけれども、北京で仆れる前に、キリストが迎えに来られた。白き衣を着て。

「お母さん、イエス様が迎えに来られたので、お先に失礼します」

と言つたそうです。まあ参つたですね、私は。母が兄の遺骨を携えて帰つてきたが、その母は黄海の船上で失明してしまつた。失明の母が遺骨を抱えて来ました。もちろん二番目の兄貴に助けられて帰つてきたんですけれども。私は全く窒息しそうでした。

しかし、本当の伝道は言葉ではない。言葉ならば、その言葉は本当に全存在から発した「靈なり生命なり」であります。言葉にしろ、行為にしろ、そこにキリストの生命が、愛が流れていることが大事です。「生命」と言つた時には必ずその中には「愛」が流れている。愛が流れていないものは生命ではない。そういう事態ならば、それが言葉であろうが、行為であろうが、何であろうが、黙つていようが、何であろうといい。或る人がただ「在る^あ」ということが、何か知らんけれども、周囲に力を与えている。無言の言葉、無言の行為です。



老子が「無為の為」ということを言ったが、行為無き行為ということですが。

在ることが他を自然に在らしめている在り方。太陽が在ることが自然に地球を在らしめている。これは神の生命が、キリストの生命が、その人に溢れていなければ、そういう「在る」ということは、いくら在ったって、本当の「在る」ではない。我々が「在る」ということはキリストにおいて在るということ。その他に「在る」ということはない。これはパウロがはつきりとそのことを、

「キリストの中において在る」と言っている。

●白熱の愛の圧倒

山上の大告白はもの凄くて、なんとも言えない。

「幸いなるかな、霊の貧しき者……」

から始まって、5章から7章の終りまで。マタイ伝7章に、

「²⁸イエスこれらの言を語りおえ給えるとき、群衆その教えに驚きたり。²⁹それは学者らの如くならず、権威ある者のごとく教え給えるなり。」(マタイ7:28～29)

とある。「権威ある者のごとく」は「権威ある者らしく」です。神の権威です。

剣道で相手を圧倒する。その圧倒の仕方は、相手が

「参りました!」

とあって、それにしがみつきたいような圧倒のしかた、これが活かす剣なんです。敵を殺すのではない。

「これは太刀打ちできない!」

と言って、逃げて行くのではなく、しがみついてくる。キリストの前に平伏すとはそういうことです。キリストの前に降参して、キリストの中に飛び込みたくなる。これが本当の力強い白熱の愛のある圧倒のしかたであります。我々はそのようなキリストに福音書を通して出会うわけです。本が何百万巻あろうが、ただ聖書一巻。その中からどこを選ぶかという、文句なしに、福音書です。マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネ。これは渾然たる一つです。

●福音書はわがキリスト

マタイ伝はキリストの言を詩的に表現している。山上の垂訓は最も詩です。無韻詩です。内的リズムがある。マルコ伝は「直ちに」とよく書いてある。即行為の世界、キリストの行の世界です。ルカ伝は内面的なハートの、心の世界。放蕩息子の譬話たとえにしても、良きサマリヤ人の話にしても、心の世界が中心です。ヨハネ伝は霊の世界です。もちろんこれらは霊言



靈行、靈心です。人間の实存の相は言・行・心で、心の中のものは言に表われ、行に現れる。この共観福音書をヨハネ伝という霊の福音書が一如に捕まえているようなものです。この四つは離すことができない。不思議なわけです。キリストの言行心霊というこの福音書はもうやりきれん。福音書だけを綴じてポケットに入れておきなさい。これは本当のお守りだよ。私たちにとって、

「福音書はわがキリストなり」

ということですよ。

●天心

19 なんじら己がために財宝を地に積むな、ここは虫と錆とが損い、盗人うがちて盗むなり。20 なんじら己がために財宝を天に積み、かしこは虫と錆が損わず、盗人うがちて盗まぬなり。21 なんじの財宝のある所には、なんじの心もあるべし。

「財宝」というのは、この世の物質で一番尊ぶわけだ。けれども、これはみな

「虫と錆とが損ない、盗人がやってきて盗み」

或いは火事で焼けてしまう。だんだん滅びてしまう。結局みなダメになってしまう。我々は向こう側に行くときに何かを持っていきますか。どんな金持ちも、どんな物持ちも、例外なしに向こう側に何も持って行くわけにいかない。

私たちは聖書だけでも持って行きたいけれども、それもダメだ。だから、我々が活ける聖書に自らならなければ。私たち自身が活ける聖書になれば、もう何もいらん。また、それでなければ天国に行けないわけだ。

「天国の資格は聖書を本当に生きたか」

ということ。クリスチャンであるなら、それだけ神さまの問い方は厳しい。聖書を知らない人なら仕方がないけれども、聖書にぶつかった限りは、

「お前は聖書の活字となったか、活ける字となったか」

と問われる。それが天国の門を通るときの資格試験ではないかね。

「財宝を天に積み」

とはどういうことですか。どういう宝を天に積むのか。

「天心を持つ」

ということですよ。天の心を持ってやっていきなさい、ということ。天心を持つことが宝を天に積むことです。

「キリストの心を心とせよ」

とパウロが言いました。キリストと同心となることが

「宝を天に積む」



ということですが。

●神有

物質的というなら、無一物無尽蔵ということですが。パウロが言ったように、

「在れども無きが如く、無けれども在るが如し」

ということ。在れども、そんなものは自分のものではない。私たちが有っているものはみな「神有」ですから。神さまの有ものです。私有にしる、共有にしる、どちらもこれは本来神有、神さまの有です。神有という自覚がなければ、共有を本当に共有として、また、私有を本当に私有として、使うことができない。人のために惜しみなく使うというのは、それは神さまの有として自覚しているからです。

「エホバ与え、エホバ取りたもう。エホバの聖名は讃むべきかな」(ヨブ1:21)

とヨブが言った。そういうわけであります。

●天眼・靈眼

22 身の燈火ともしびは目なり。この故に汝の目ただしくば、全身あかるからん。23 然れども、なんじの目あしくば、全身くらからん。もし汝の内の光、闇ならば、その闇いかばかりぞや。

「目がただしく」とは、目がちゃんと一点に坐っているような単一な目ということ。純一なる目、分裂していかないこと。心が一つでなければ目が一つでない。我々の目は二つだけれども、二にして一である。二つの目の奥に一つの心がある。この心が分裂したらダメです。「目ただしくば」とは心の目、心眼が単一、一如すがたの相で、心が分裂していかない全的な在り方というわけです。そうしたならば「全身あかるからん」という。

心眼いんげんがそういう目であるためには、天の眼、天眼てんげんをこの心眼が宿していなければ。あるいは靈眼れいげんと言ってもいい。キリストの靈眼れいげんを受けとっているような角度です。その時に初めて私たちの中に「全身あかるからん」という光が上から、絶対界から、キリストから来ている。そういうような聖言であると私はつかませられています。

●神知りたもう

24 人は二人の主に兼事かねつかうることを能わず、或は、これを憎み、かれを愛し、或は、これに親しみ、かれを軽しむべければなり。汝ら神と富とに兼事かねつかうることを能わず。

とにかく「二」というのはダメです、分裂するのは。大体、「二」という現実是非常にある。右があれば左がある。両極というものはある。男・女とか、光・闇とか、いろいろ相対的



なものがある。

「汝の右の手のなすことを左の手に知らせるな」(マタイ6:3)

とキリストが言われた。右があれば左がある。左のない右、右のない左というのはないわけだ。平面論理ではそうなんだ。「汝の右の手のなすことを左の手に知らせるな」というのは、

「左をなきものとせよ、左を思うな」

ということですよ。現実には左がある。両極がある。けれども、右という一極、あるいは左という一極、

「この一極だけ」

ということ。両極は相対関係だが、

「一極絶対となれ」

ということですよ。絶対とは対称が無いということ、対称に絶するということです。一極絶対であるためには、対称を持たないところの絶対的な存在である神さまとの関係だけがたっている。そのときにこの一極が絶対な極になる。これを一極絶対という。

詩篇139篇の、

「神知りたもう」

ということ。だから、相手は問題でなくなる。在れども無きが如くなる。そのときに、この「右」の為すことが本当に天的なわざになる。人がどう思おうが——誉める誉めない、誹る誹らない、認められる認められない——そんなことは考えない。これに於て力が来ている。聖意は必ず力をもっている。そうでなければ、それは観念です。聖意が来たら、それは力をもっているから、止むにやまれずして、この右が何かをやる。そういうのが一極絶対の姿です。

● 已むを得ざる

佐藤一斎(1772～1859)の『言志録』の中の言葉に、

「雲煙は已むを得ざるに聚り、

風雨は已むを得ざるに洩れ、

雷霆は已むを得ざるに震つ、

是に以て至誠の作用を觀る可し。」

とある。「至誠」とは止むにやまれずして動くことです。信仰の世界は、止むにやまれずして動かなければ本ものでない。パウロが言ったでしょ、

「福音を宣べ伝えざれば災いなるかな」

「止むを得ず、止むにやまれないで、仕方がないから私はやっている」

と。これは「止むを得ない(アナンケー)」という言葉です。エレミヤも、

「火が骨の中で燃えるがごとくで、黙さんとしても忍ぶに耐えがたし」(エレミ



ヤ20・9)

と言う。これも「止むを得ざるなり」としてやっている。人の姿というものは、

「何か作務的で頭でやっているか、全存在として止むにやまれずして動いているか」

これはもう分かる。その姿はどこで見るか。子供の姿です。子供は本当にやむにやまれな
い動きをしている。だから、シラーが、

「人間は遊んでいる時に一番人間らしい」

と言った。それは楽しくてしようがないから。何をするのも、「遊び」のすがた、内側か
ら溢れてしようがない事態、これが「止むを得ず」ということ。その内側が上から来てい
る内側でなければダメです。

●無極

それは神・キリストから来ているところの一極絶対の姿です。一極絶対のこの極は、も
う少し言わせると、これは無極なんです。自分が一極であることすら意識しないような極
です。これが無極、無者ということ。そこにはもの凄いものが展開する。道德の世界は、
「こうしようか、ああしようか。これが良いと思う」
なんて考えて選択する。

「実践理性は感性に対して戦って、実践理性の命ずることに従って行動するところに道
徳的な姿がある」

とはカントの一言ですが、それで或る真理はある。カントはやはり信仰の人だから最後には、
「汝為すべきが故に為し能^{あた}つ」

と言った。この「為すべき」の「べき」はもの凄い「べき」だから、「為し能^{あた}う」とまで言
ってしまった。現実の人間ではそれはほとんど不可能でしょう。「べき」が「能^{あた}う」にはな
かなかならない。この「べき」が上からくるところの御霊の力になると、「能^{あた}う」になる。
キリストのヨハネ伝15章の言葉の、

「汝ら我を離るれば、何事も為し能^{あた}わず」(ヨハネ15・5)

とは、逆に言う、

「我によれば何事も為し能^{あた}う」

とくるわけです。

●靈法即如

自然の姿は止むに止まれずしてすべてが動いている。これは物理法則です。道德法則で
はダメなんだ。道德法則は素晴らしいけれども、残念ながら、人間の罪というものがこれ
を妨げる。それはパウロがロマ書7章で言っているとおりです。

「²²われ中^{うち}なる人にては神の律法^{おきて}を悦べど、²³わが肢体のうち^{のり}に他の法ありて



我が心の法と戦い、我を肢体の中にある罪の法の下に虜とするを見る。²⁴ 噫
われ悩める人なるかな、此の死の体より我を救わん者は誰ぞ。」(ロマ7・22)

これは万人の嘆きです。だから、人間は、自然法則の止むにやまれずという法則と同じもう一つの法則の世界に入らなくてはいかん。それは道徳ではダメです。自然法則、道徳法則よりも一つ上の法則、靈法の世界です。

「生命の御靈の法」(ロマ8・2)

とパウロが言ったその世界です。靈法は止むにやまれずして人を動かすところの世界です。だから、奇蹟はありません、全部これは法則ですから。靈の活ける法則です。活きた靈の法則が私たちに本当の自由を与える。本当の自由の姿は靈法に即して動いている姿です。靈法即如の世界です。

そうやってキリストの中に乗ってしまっただけならば、奇蹟なんてものはない。キリストはもの凄いことをなさったが、あれはみな靈的法則がもの凄い力をもって、神さまの力が働いている。物理法則を超えてしまう。

だから、キリストは海の上を渡ってくる。復活のキリストがお魚まで食べてしまった。普通の神学者や牧師さんはあそこをみな笑う。ところがこれは事実だ。私はこの靈法の世界には、キリストのなさった事には、全部降参します。降参して圧倒されるから、その中に自分を入れるだけの話です。楽しいですよ、本当に。

●無極絶対

私は疑いを知らん、馬鹿だから。皆さんは利口すぎる。私みたいに馬鹿にならないと。単一に、単細胞に。だから、キリストが、

「幼児のごとく」(マタイ18・3)

「バカになれ」と言う。真理はそういった単一の、一極の、絶対の姿のところにグングン働いてくる。無極絶対という。

自然の中においてももの凄い法則が働いている、焦点している。芥種はゴミからしたねと思うくらい小さい。ところがあの芥種の中に大きな灌木になるような素質が在る。

「芥種のような、見えないような小さな信仰があれば……」(マタイ17・20)

とキリストが言われた。これは原始力です。キリストの原始力を持った私たちは、この芥種の中において既にでき上がった大きな辛子の木からしを見ている。そういう見方をしなければ。

道元の言葉にもある。

「二塵の中に大千の経巻あり」

と。一つの塵の中にお経が入っている。道元は自然を見て、そこに方法が、仏法が働いているすがたを見ている。楽しいよ。



「二草一木俱に身心なり」

という。これはいい言葉だ。一草一木は私と共に身であり心であると。草を見て、これは私と同じ心と身で、もう通じあっているという。

「一莖草中にも有情世界あり」

一莖の草の中に情けの有る世界があると。草が生きているのを見て、自然界の生命の情を見ているわけです。ウィリアム・ブレイク (1757～1827 イギリスの詩人・画家) の詩に、

「一粒の砂の中に宇宙を觀、

一莖の野草に大空を觀、

君の手の掌に無限を握み、

一刻の中に永遠を持つ。」(「無垢の予兆」)

という言葉がある。有限をもって無限をつかむということ。無限が有限をつかむのではない。我々は有限なる小さな人間だが、ところが、これが宇宙をつかむ。永遠の今において永遠をつかむ。これはどうして可能であるか。神さまという、キリストという、無限無量なる方をいただきますと、その中に飛び込みますと、こういうブレイクの言葉には、「はい、その通り」と答えられる。

●無為の為

25 この故に我なんじらに告ぐ、何を食ひ、何を飲まんと生命のことを思い煩ひ、何を著んと体からだのことを思い煩うな。生命は糧かてにまさり、体は衣まさに勝るならずや。26 空の鳥を見よ、播かず、刈らず、倉に収めず、然るに汝らの天の父は、これを養いたもう。汝らは之よりも遙はるかに優る者ならずや。27 汝らの中たれか思い煩ひて身の長一尺たけを加え得んや。28 又なにゆえ衣のことを思い煩うや。野の百合は如何にして育つかを思え、勞せず、紡つむがざるなり。

自然をキリストはご覧になつて、

29 然れど我なんじらに告ぐ、榮華を極めたるソロモンだに、その服装よそおいこの花の一つにも及しかざりき。

と仰つた。キリストは自然界をみて、神さまはこんないろいろな恵みを与えているから、26 空の鳥を見よ、播かず、刈らず、倉に収めず、然るに汝らの天の父は、これを養いたもう。汝らは之よりも遙すくに優る者ならずや。

と言っている。

「この通りに文字通りやったら、文明は成り立たない」

なんて考えるのは、キリストのこの本当の心をつかんでいない。天の力が、生命がいかに山川草木において豊かにこれを生かしているか。だから、

「何をしてもいいけれども、自分でやったらダメだ、原動力を受けとれ」



ということですが。そうしたら、老子の

「無為の為」

の世界に入る。何もしないでも、自然に止むにやまれずして、やる事が出てくる。自分でやろうとするのではなくて、上からのものを受けとることが無為の世界です。その無為のところに本当の上からの行為が、神・キリストの行為が出てくる。だから、我々の言うことが為すことは全部、キリストが我々を通してこれを為したもう。我々はその器にすぎない。

「我等この宝を土の器に有てり、これ優れて大なる能力の我等より出でずして神より出づることの顕れんためなり。」(コリント後4:7)

とパウロが言っている。自然が太陽の光熱を受けて豊かに展開しているように、私たちは神・キリストの力を、生命を、愛を受けて豊かに展開していく。

●自然靈然

老子の「無為の為」の一番深い意味を、私たちは福音の角度から老子以上につかめる。それを私はここで「靈然」と言った。自然は太陽の力で自から然とやっている。我々は神の靈、キリストの靈によつて、靈的光の世界、靈的な止むにやまれないものが現れてくる。自然界は自然である。しかし、人間界は靈然の世界にならなければ本当でない。自然、靈然の世界です。私たちは自然と一如になつて、自然靈然、自由自在。もう何のこだわりもない。クリスチャンというものは概念では説明できない。だから私は「無限無量」という言葉が好きです。無限無量の力、愛、生命——何といつてもいい——何でもそれが働いてくる。ロダンという彫刻家がいる。

「大事な点は感動すること、愛すること、希望をもつこと、身ぶるいすること、生きることだ。芸術家である前に、人間であることだ」

と言った。やはりああいう芸術家は何かに動かされているものだから、こういう言葉が爆発してくる。我々が営むことはいろいろある。学者、政治家、実業家、医者、軍人とかいろいろある。その前に

「人間であれ」

ということですが。

「キリストわがうちに生く」

ということが現実でなかったら、いくら

「十字架せられたり」

と言つたつてダメです。「キリストわがうちに生く」ということが本当に「十字架せられたり」の奥に実を結ばなかつたら、「十字架せられたり」は意味をなさなくなる。パウロがコリント前書15章で言つたでしよ、

「若しキリスト甦えり給わざりしならば、汝らの信仰は空しく、汝等なお罪



に居らん。」(コリント前15・17)

と。パウロはあれだけ十字架を強調したけれども、しかし復活がなかったならば、キリストの死はいたずらになる。贖罪だけであつたらダメだ。だから、パウロにとつても、十字架を強調する時は強調しますが、その背後にはちゃんと復活がある、聖霊がある。どうぞ、皆さん、決して観念になつてはいかん。非常に有機体的な、ドラマチックな構造ですから。

●お前を除け者にはしない

アメリカにウォルト・ホイットマン(1819～1892)という詩人がある。型破りな詩人です。その「遊び女に告ぐ」という詩に、

「気を落着けておいで、

私に対して気兼ねは要らない。

私は自然のように自由で、

元気旺盛なウォルト・ホイットマンだ、

太陽がお前を除け者にはしないうちは、

私はお前を除け者にはしない。

水がお前のために輝くのを拒み、そして

木の葉がお前のために葉ずれの音をたてるのを拒まないうちは、

私の言葉もお前のために輝き、音をたてることを拒まない。

私の娘よ、私はお前と会う約束をしよう。そして、

お前は私に会うにふさわしい準備をしなさい。

そして、私が会いに来るまでに、

辛抱づよい、立派な者になつていなさい。

ではまた会うまで、

私はお前が私を忘れないような意味深い目つきで、

挨拶しておく。」

という言葉がある。遊び女を相手にして決して審かない。彼は太陽のように明るく、一切を包み担って、自在に動いていたような詩人です。

キリストが言われた。

「⁴⁵天の父はその目を悪しき者のうえにも、善き者のうえにも昇らせ、雨を正しき者にも、正しからぬ者にも降らせ給うなり。……⁴⁸然らば汝らの天の父の全きが如く、汝らも全かれ。」(マタイ5・45…48)

と。「全き」ということは、

「相対的な判断はするな。善悪を超越したところに来なさい。そして、相対的な善悪を全部救いあげなさい。全部それを愛しなさい」



ということ。愛するとは相手を本当の世界に入れてしまうということです。キリストの嫌いなのはパリサイですから。

●覚他

私たちの福音の境地は大きな本当に力強い世界です。しかし、万物は、現実パウロの嘆きのようにどうにもならん、だんだんおかしくなっていく。これは人間界がどうにもならんから。けれども、決して望みは失わない。世の中がダメになればなるほど、暗くなればなるほど、いよいよ輝いていかなくは。熾んなるかな、私たちのこの自覚たるや。これを「覚他」という。他者を覚える。自覚ではない。他者は神・キリストです。神・キリストを意識していること。これが本当の自覚なんです。

漱石が、

「則天去私」

と言った。天に則し私を去る。彼はこれを悲願して生きていた。私は、

「則人棄私」

と言いたい。即ち則天去私は縦の関係で、則人棄私は横の関係の愛であります。人を助け起こし、自分は棄てられる。

「人その友のために己の生命を棄つる、之より大なる愛はなし。」(ヨハネ15・13)

とキリストが仰った。

●一日を永遠として

³⁰ 今日ありて明日、炉に投げ入れらるる野の草をも、神はかく装い給えば、まして汝らをや、ああ信仰うすぎ者よ。³¹ さらば何を食くらひ、何を飲み、何を著きんとて思い煩うな。³² 是みな異邦人の切に求むる所なり。汝らの天の父は凡てこれらの物の汝らに必要なを知り給うなり。³³ まず神の国と神の義とを求めよ、然らば凡てこれらの物は汝らに加えられるべし。³⁴ この故に明日のことを思い煩うな、明日は明日みずから思い煩わん。一日の苦勞は一日にて足れり。

「何をもう思い煩うなかれ」と。靈然の世界に入れば、もう思い煩いはなくなってしまう。

「一日は即ち一生である」

とは内村先生の言葉だ。一日を一生として生きよ。何年生きたってダメなんだ、本当の生き方をしないと。しかし、本当に一日をキリストと取っ組んでキリストと共に十字架を負って生きるならば、その人は一日を生きることが永遠を生きることになる。いつ仆れても、

「アーメン、ハレルヤ!」



ということですが。この世における完成なんて大したことはない。本当はみな未完成です。

偉大なる作者は、ミケランジェロは作品を造つても、最後の鑿のみは棄ててしまう。人間がもし完成なるものを造つたら、それは間違いだ。人間は地上においては未完成が本当だ。そして、それは驚くべき完成を約束している姿なんです。ここで完了してしまつたらお終いだ、それだけの話だ。ところが、未完成の姿はどんな驚くべき完成が待っているか。その未完成の作品の中に驚くべき無限無量なるものが含まれているのが本当です。ロダンの彫刻にもよくそういうのがある。彼は一気にグーツとその勢いで彫つたら、もうその先は考えないから棄ててしまう。

バッハという音楽家は、日曜日毎に唱うカンタータを作つては屑かごに棄ててしまう。それを取つておく必要がない。その時に即興的に、上からグーツと来て書いていく。そこで歌われれば万歳ハレルヤで、後はその次はまた作ればいいと、そんなものは棄てている。あまり屑かごに紙屑があるから、奥さんがそれを見たら、楽譜だから、これはもつたいたいと奥さんが取つておいてくれたから、あれだけのバッハの曲が残つたという話です。

本当の世界はみなそうです。その時その時に本当に打ち込んで、あとは知らん。これが止むにやまれざるところの姿、靈然のすがたです。こだわらない。天の巻物には、天曲には記しるされている。

● 儂くみえても儂くない

「空くうの空なるかな、すべて空なり」(伝道之書Ⅰ:Ⅰ)

という。相對の世界で問題にしているものは、みな「空の空なるかな、凡すべて空なり」だ。やはりコーヘーレスは真理を言つてくれた。本当にそうなんだ。けれども、キリストを受けとつた世界は、どんなに儂はかなくみえても、それが儂くない。

色は匂へど散りぬるを (諸行無常)

わが世たれぞ常ならむ (是生滅法)

有為の奥山今日越えて (生滅滅已)

浅き夢見じ酔ひもせず (寂滅為樂)

「いろは」歌は素晴らしい。

「諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅為樂」

ということを日本の歌にした。「色は匂へど散りぬるを」、散ってしまったって無常だ。「我が世たれぞ常ならむ」、この無常の世界は消滅でもつてどうにもならん。「有為の奥山今日越えて、浅き夢見じ酔ひもせず」、このいろいろな有限な有情の世界を、相對の世界を今日はのり越えて、もう浅い夢はみない。この世に酔いもしない。本当の覚、悟道の、悟りの世界に入る。そういうことでありましょうけれども、この福音は悟り以上の世界なんです。これは創造してやまない、展開してやまない。



●無色無限色

祈るときは、みな、自分の調子で結構です。一極絶対です。相手はキリストさまです。そして、一極絶対でやっているのと、今度は、皆の響きが交響楽みたいになる。これが有機体的な、交響乐的な響きとなってくる。相手が一者ですから、あなた方一人びとりにいろいろな現象として現れてくるから、楽しいわけです。

あなた方は露みたいなものだ。太陽の無色透明な白光が無色透明な露に当たって——両方とも無色です——七色の虹がでてくる。あなた方は虹の一粒一粒です。いろいろな光を発してください。光を発するためには無色でなくてはいかん。太陽も無色なんだ。無色が無色に当たると光を発する。即ち自分を白光の世界に投げかけていくと、キリストに投げかけていくと、このキリストの無色の中に溶け入ってしまうわけです。ところが、キリストの無色というのは無限色、無限の色をもった無色です。無限の色をもった無色だから、これにぶつかっていくと七色から無限色になっていく。無限色に反映してくる。素晴らしいね。だから、私の言っている「無」は決して虚無ではないので、「無限無量」を言っている。表現ができない、無表現。表現に絶する、無限無量です。そういうようにキリストを受けてください。

「キリストの他に要りません、あなたの他にいりません」と。

「天上天下あなたの他に何をか慕わんや」

と、詩篇73篇に出ている。天上天下キリストの他に何をか慕わんや。

「我よりも……を愛する者は我にふさわしからず」

とキリストは言われた。ということとは、

「我と絶対の愛の世界に入れ。そうしたら、みな棄てたものを全部、お前が救い上

げてしまう。全部、本当に楽しい兄弟姉妹になるよ」

ということなんだ。間違えては困る。いい加減に兄弟姉妹なんて思ったってダメです。キリストを本当に受けとれば、言わず語らずのうちに、お互いに抱きつきたくなくなってしまふ。そういうような関係は上から来ている。地上のいろいろな関係があっても、ここは天界ですから、クリスチャンが「兄弟姉妹」というのは天界的な姿を言っている。そういう角度で楽しく、イエスさまの中に自分を投げ入れてください、ぶっ倒れてください。そうしたら、

「キリストの腕の中、懐の中だった」

というわけです。霊の現実というものは頭で考えられた現実とは違う。いいですね。そういうわけで、キリストの中に入りましょう。

